

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：心理・人間関係学科

資格：講師

氏名：竹中 一平

研究分野	研究内容のキーワード
社会心理学, ストレス測定法	流言, 友人関係, ストレス
学位	最終学歴
博士 (心理学), 修士 (心理学), 学士 (人間科学)	筑波大学大学院 人間総合科学研究科 心理学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 双方向型授業の実施	2012年4月～現在に至る	科目：心理実験実習Ⅰ・Ⅱ 概要：調査法と生理実験を担当した。それぞれにおいて、5～10名程度を1グループ（全6グループ）として、各グループが個別に実施する研究の指導および、研究レポートの執筆の指導を行った。
2. マルチメディア機器の利用	2012年4月～2012年9月	科目：オフィスワークの情報処理 概要：コンピュータを用いた演習形式の授業を行った。コンピュータの基本的な使い方、情報リテラシーについて簡単に講義をし、Microsoft Office Word2007、Excel2007、PowerPoint2007の利用方法について、実際にコンピュータを操作しながら学習した。特に、案内状や稟議書、給与計算など、実務場面で使用可能な文書やExcelシートの作成指導を重点的に行なった。
3. マルチメディア機器の利用	2010年9月～2011年3月	科目：情報処理演習 概要：前期の情報処理基礎で十分に課題が実施出来なかった学生を対象とし、Microsoft Office Word2007、Excel2007、PowerPoint2007の利用方法について、前期の復習をしながら、個別指導に重点をおく形で学習した。
4. マルチメディア機器の利用	2010年4月～2010年9月	科目：ワープロ演習(A) 概要：Microsoft Office Word2007の利用に特化し、各種機能の使用方法についてコンピュータを操作しながら学習した。また、保育現場で利用する頻度の高いお便りやチラシ、ポスター等を実際に作成した。
5. マルチメディア機器の利用	2010年4月～2010年9月	科目：情報処理基礎 概要：コンピュータを用いた演習形式の授業を行った。コンピュータの基本的な使い方、インターネットや電子メールの利用方法、Microsoft Office Word2007、Excel2007、PowerPoint2007の利用方法について、実際にコンピュータを操作しながら学習した。
6. マルチメディア機器の利用	2010年4月～2012年3月	科目：卒業予備研究(A)(B)・卒業研究(A)(B) 概要：保育現場で活用できる情報処理技術を習得するために、コンピュータを利用した。具体的には、各種文書・チラシの作成や、デジタルカメラでの撮影および撮影した画像の処理、デジタル紙芝居の作成、パソコンを用いたお絵かき等の活動を行った。
7. 双方向型授業の実施	2008年4月～2008年9月	科目：心理学基礎実験 概要：対人距離を題材とした実験実習を担当した。事前に仮説を立てて実験を行い、得られたデータについて解析を行った。その結果について、学生と議論をしながら、結果のまとめと考察、それらを踏まえたレポート執筆について説明をした。
8. マルチメディア機器の利用	2006年4月～2007年3月	科目：コンピュータ演習Ⅰ・Ⅱ 概要：コンピュータを用いた演習形式の授業を行った。コンピュータの基本的な使い方、インターネットや電子メールの利用方法、Microsoft OfficeやSPSSをはじめとしたいくつかのソフトウェアの利用方法について、実際にコンピュータを操作しながら学習した。
2 作成した教科書、教材		
1. スタンダード自己心理学・パーソナリティ心理学	2015年11月10日	【担当部分】第2章「パーソナリティの諸理論」および第7章「友人関係・恋愛と自己・パーソナリティ」7.1～7.4 【概要】第2章ではパーソナリティに関する主要な理論を紹介し、第7章では友人関係とパーソナリティとの関連についてまとめた。
2. 質問紙調査と心理測定尺度	2014年7月10日	【担当部分】第7章「データの整理」 【概要】質問紙調査において、質問紙を回収してからデータを入力し、得られたデータの単純集計を行うまでの一連の過程について解説した。特に、ExcelやSPSSの活用を念頭に置き、それらのソフトウェアの具体的な使用方法も踏まえて解説を行っている。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 公開講座 講師	2011年11月26日	公開講座「大地震発生時の避難所生活」の講師として、大規模災害時の避難所生活に関する説明及び、避難所運営訓練システム（STEP）の実施を行った。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
2. 公開講座 講師	2010年7月3日	公開講座「大地震発生時の避難所生活」の講師として、大規模災害時の避難所生活に関する説明及び、避難所運営訓練システム (STEP) の実施を行った。
4 その他		
1. 保育実習 (施設実習) 担当	2009年4月～2010年3月	施設実習の担当として、事前指導の中で、実習に関する心構えや実習先施設の概要、実習に関する注意事項の説明、実習に対して不安をもつ学生への個別対応をはじめとした学生対応を行った。また、実習先施設との交渉や実習巡回指導に関する教員分掌の作成および教員への依頼をはじめとした実習に関連する各種事務作業を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 認定心理士(登録番号：第38965号)	2012年10月	これまでに取得した学位を評価され、「認定心理士」の資格を取得した。当資格は、心理学に関する標準的な基礎知識と基礎技術とを正規の課程において修得していることを認定するものである。当資格によって、心理学に関わる講義を行うために必要な基礎知識・技能を、問題なく備えていることが示されると考える。
2. 専門社会調査士(登録番号：第001398号)	2008年10月	「大学生の日常会話におけるうわさの類型化」の論文が高く評価され、「専門社会調査士」の資格を取得した。当資格は、社会調査の知識や技術を用いて世論や市場動向、社会事象等を捉えることのできる能力を有する社会調査の専門家に与えられる資格である。アンケートや面接等の指導において大いに活躍できると期待される。
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 「避難所運営訓練システムによる防災教育のあり方」に関する勉強会 講師	2008年5月16日	東京電力技術開発研究所において開催された「避難所運営訓練システムによる防災教育のあり方」に関する勉強会において、講師として「避難所運営訓練プログラム (STEP)」の紹介および、実施を行った。
4 その他		

1. 平成27年度教育改革・改善プラン事業への応募の採択	2015年8月21日	平成27年度「教育改善・改革プラン」の募集に「授業改善のための研究会制度の設立」として応募し、提案内容が採択された。
2. 学科倫理審査運営委員会委員	2015年4月～現在に至る	心理・社会福祉学科、心理・人間関係学科、文学研究科臨床心理学専攻の研究倫理審査に関わる運営委員会の委員を務めている。
3. 学科倫理審査ワーキンググループ 委員	2015年3月～現在に至る	心理・社会福祉学科、心理・人間関係学科、文学研究科臨床心理学専攻の研究倫理審査に関わるワーキンググループの委員を務めている。特に、研究倫理審査システムの開発において、開発業者とのやり取りや、開発されたシステムの修正、各種登録作業を行っている。
4. 平成25年度「専門教育における協同学修及び知的創造活動の拠点づくり」事業 学科事務担当者	2013年4月～2014年3月	左記事業に、学科側事務担当者として参加した。当該事業は、33メートル×23メートルの1フロアを、無線LANによるネットワーク環境を備えた、アクティブラーニングが可能な心理実験室を含む3教室と3小実験室、TAが常駐し学生の「居場所」となる1室に改修する事業であった。具体的な職務内容は、学科教職員の意見集約と調整および、改修に関する学科案の取りまとめと、学科案を踏まえた大学施設課および施工担当者との交渉であった。
5. 学科広報委員 (HP担当)	2012年4月～2015年3月	心理・社会福祉学科の広報委員として、学科ホームページの運営・管理業務に携わった。具体的には、ホームページの更新・修正作業を行っている。
6. 学科コンピュータ室 管理担当	2012年4月～現在に至る	心理・社会福祉学科のコンピュータ室の管理業務に携わっている。具体的には、保守業務を委託している業者とのやり取り、教室の環境維持、予算管理、コンピュータの利用や統計処理に関する学生からの質問対応、学科教職員および学生のアカウント管理、各端末へのアクセスログの収集と分析を行っている。
7. 人間学研究会 総務理事	2012年4月～現在に至る	心理・社会福祉学科の教職員・学生による組織である人間学研究会の総務理事を担当した。具体的には、予算案および事業案の作成と、学生向け講座事業 (就職試験対策講座、保育士試験対策講座、公務員試験対策講座、先輩-後輩の交流会など) の運営、講座を委託している外部業者との交渉を担当している。
8. 岡山短期大学 平成23年度自己点検・評価 ALO補佐	2011年4月～2012年3月	平成23年度自己点検・評価活動において、ALO補佐として平成24年度に提出する自己点検・評価報告書の作成に携わった。具体的には、平成24年度第三者評価ALO対象説明会への参加や、学科内での提出文書・資料の管理、提出・備付資料の準備、資料一覧の作成を担当した。また、報告書の執筆では、基準Ⅰ-B、基準Ⅱ-A-4、基準

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
9. 岡山オルガノン双方向コンテンツ委員会 委員	2010年4月～2012年3月	Ⅱ-B-1 観点(3)を担当した。 平成21年度大学改革推進等補助金(大学改革推進事業)として採択された事業「岡山オルガノン」の部会である双方向コンテンツ委員会の委員として会議に参加するとともに、岡山オルガノンと大学間の各種連絡業務に携わった。
10. 岡山県養護実習委員会 書記	2010年4月～2011年3月	岡山県養護実習委員会書記として、委員会開催時の議事録作成や委員会の運営に携わった。
11. 岡山オルガノンe-Learning委員会 委員	2010年4月～2012年3月	平成21年度大学改革推進等補助金(大学改革推進事業)として採択された事業「岡山オルガノン」の部会であるe-Learning委員会の委員として会議に参加するとともに、岡山オルガノンと大学間の各種連絡業務に携わった。
12. 岡山短期大学・岡山学院大学紀要 編集委員	2009年4月～2012年3月	岡山短期大学・岡山学院大学紀要編集委員として、紀要の編集作業を担当した。編集は2名の教員で担当し、平成21年度は補佐として主に紀要への執筆依頼や投稿された原稿の処理を行った。平成22年度・23年度は主担当として、統括および予算獲得・管理、業者とのやり取りを担当した。
13. 岡山県養護実習委員会 委員	2009年4月～2011年3月	岡山県養護実習委員会委員として、保育士養成課程における保育実習(施設実習)に関する養成校間の調整や実習先施設との連絡に関する会議に出席した。
14. 岡山県大学人権・同和教育懇談会 委員	2009年4月～2010年3月	岡山県大学人権・同和教育懇談会の委員として、岡山学院大学・岡山短期大学の人権・同和教育への取組を推進した。また、懇談会に参加し、岡山学院大学・岡山短期大学の人権・同和教育への取組状況の報告をするとともに、各大学との意見交換を行った。
15. 筑波大学生命環境科学等支援室 技術補佐員	2005年4月～2006年3月	技術補佐員として、日本語・日本文化学類のコンピュータ実習室の管理を行った。具体的には、サーバ(Red Hat Enterprise Linux)の管理と、バックアップ、アカウント管理、各端末とプリンタの保守を行った。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. スタンダード自己心理学・パーソナリティ心理学	共	2015年11月10日	サイエンス社	【担当部分】全文265頁中32頁、第2章「パーソナリティの諸理論」(15-35頁)、第7章扉文・7.1～7.4「友人関係・恋愛と自己・パーソナリティ」(pp.118-128頁) 【概要】第2章：パーソナリティについて、その定義を紹介し、代表的な理論である類型論・特性論・相互作用論についてそれぞれ解説した。第7章：友人関係における自己とパーソナリティとの関わりについて解説した。
2. 質問紙調査と心理測定尺度	共	2014年7月10日	サイエンス社	【担当部分】全文323頁中29頁、第7章「データの整理」(122-150頁) 【概要】質問紙調査において、質問紙を回収してからデータを入力し、得られたデータの単純集計を行うまでの一連の過程について解説した。特に、ExcelやSPSSの活用を念頭に置き、それらのソフトウェアの具体的な使用方法も踏まえて解説を行っている。
3. ジャーナリストの惨事ストレス	共	2011年12月12日	現代人文社	【担当部分】全文167頁中10頁、第1章2節「東日本大震災におけるホームページ活動」(7-9, 11-17頁) 【概要】報道人ストレス研究会のホームページにおいて、東日本大震災に際して公開したページ(現地で活動している災害救援者やジャーナリスト、ボランティアに対する惨事ストレスの概要およびその予防法・対応法を紹介する内容)の概要およびそのアクセス数の推移についてまとめた。
2 学位論文				
1. 大学生の日常会話におけるうわさの伝達	単	2007年3月23日	博士論文(筑波大学)	大学生の日常会話において話されるうわさを対象とし、計7つの実証研究を行った。うわさの類型を導出し、各下位類型の特徴を、伝達経路やうわさが話される集団の集団特性の点から明らかにした。そして、うわさの伝達に関する個人内過程を意思決定過程の観点から検討し、モデルを構築した。
3 学術論文				
1. 研究倫理審査システムの開発と評価(査読付)	共	2017年3月31日	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 64, 41-49	【担当部分】データ分析・論文執筆(全頁担当) 【共著者名】竹中一平・松村憲一・半羽利美佳・玉木健弘・長岡雅美 【概要】研究倫理審査に関する事務処理を軽減し、円滑な申請・審査を行うために研究倫理審査の電子申請・審査システムを構築し、その評価を行った。当システムは、申請書の提出や利用者への連絡等、研究倫理審査に関する事務処理の多くを自動化し、研究倫理審査に関わる情報を一元化した。さらに、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 学科コンピュータ室の利用状況分析	単	2015年7月31日	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要, 23, 31-34.	利用者にとって使い勝手の良いものにするために、必要な情報のみに絞った画面提示の制御や審査項目の入力可否の制御がなされた。
3. 類型別にみたうわさの伝達に関連する要因—内容属性と機能の評価からのアプローチ (査読付)	単	2014年3月31日	武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学), 61, 43-52.	心理・社会福祉学科 (大学)、心理・人間関係学科及び人間関係学科 (短大) の学生が利用する学科コンピュータ室の利用実態を、。2014 年度の利用開始日から利用終了日までの期間のログイン履歴を収集し、得られたデータを分析することで報告した。 大学生が日常会話で話すうわさを対象とし、類型別にうわさの伝達に関連する要因を明らかにすることを目的とした。先行研究において扱われてきた要因を、内容属性評価と機能の評価の側面から捉え直し、それぞれがうわさの伝達に関連するかどうかを質問紙調査によって検討した。分析の結果、類型によって関連する要因はやや異なるものの、一貫して機能の評価がうわさの伝達と強く関連することが示された。
4. 急性ストレスが選択的注意に及ぼす影響(査読付)	共	2012年9月	基礎心理学研究, 31(1), 42-56	【担当部分】論文執筆 【共著者名】竹中一平・河原純一郎・熊田孝恒 【概要】急性ストレスが選択的注意に及ぼす影響を検討した。実証研究を概観し、物理的ストレスでは選択性が向上する場合もある一方、心理社会的ストレスに関しては選択性が低下することを明らかにし、知覚的負荷と急性ストレスが交互作用を示すことから、両者は共通の認知資源を消費することが示唆された。
5. The effects of acute stress and perceptual load on distractor interference(査読付)	共	2012年9月	Quarterly Journal of Experimental Psychology, 65(4), 617-623	【担当部分】研究実施、データ解析、論文執筆 (該当頁の抽出は不可能) 【共著者名】Sato, H., Takenaka, I., & Kawahara, J. 【概要】知覚負荷と急性ストレスが共通の注意資源を消費するのかがどうかを検討した。フランカ課題を用いた実験の結果、知覚負荷または急性ストレスのいずれか一方が高いときには注意資源が一定程度消費され、その結果として注意の選択性が向上する一方で、両者が高いときには注意資源が枯渇するために選択性が悪化することが示された。
6. 「うわさ学」の現在	単	2009年3月25日	Mobile Society Review 未来心理, 15巻, 50-59	うわさの伝達に関する実証研究を、対人コミュニケーションによる情報伝達の視点からレビューした。また、うわさの伝達を「伝達意図による伝達」と「確認意図による伝達」の2種類の伝達形態に分ける視点について紹介し、実証研究の内容を解説した。
7. 人から人へ伝わる情報—うわさの対人心理学—	単	2008年7月25日	繊維製品消費科学, 49巻7号, 39-48	これまでのうわさ研究を概観し、うわさの伝播を明らかにしようとする研究を、集団レベルからのアプローチ、個人内レベルからのアプローチ、個人と個人との相互作用のレベルからのアプローチの3側面から整理した。そして、個人と個人との相互作用のレベルから検討した研究に関して、その内容を紹介した。
8. 家庭内の防災行動に関する研究：東京と神戸の一般住民間における比較	共	2008年3月31日	昭和女子大学生活心理研究所紀要, 10巻, 13-21	【担当部分】調査の実施を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【共著者名】清水裕・西道実・堀洋元・松井豊・元吉忠寛・竹中一平・他4名 【概要】家庭内における防災行動に関して、東京と神戸の一般住民間で比較した。分析の結果、全体として神戸の方が生命に直接関わる対策を積極的に行っていたのに対して、東京では、大地震の発生を心配はしていても、具体的な行動レベルでは準備等行われていないことが明らかになった。
9. 大学生の日常会話におけるうわさの類型化(査読付)	単	2007年9月25日	心理学研究, 78巻4号, 433-440	大学生の日常会話で話されるうわさの類型化を目的とし、うわさの内容属性と機能の評価の観点から、うわさと日常的な話題の類似点や相違点を比較し、両者の構造を検討した。研究1では、面白さや不安喚起など7内容属性と、娯楽機能や情報提供機能など4機能を用い、研究2では、面白さ、確実性、不安喚起の3内容属性を用いて、「日常話型型」「面白さ型」「不安喚起型」「怖いもの見たさ型」の4類型を抽出した。
10. 大学生の日常会話におけるうわさの類型化—内容属性の評価の観点から—(査読付)	共	2007年8月17日	筑波大学心理学研究, 34巻, 55-64	【担当部分】研究立案、データ解析、論文執筆 (全頁) 【共著者名】竹中一平・松井豊 【概要】うわさの内容に関する“面白さ”“確実性”“不安喚起”の評価の観点から、大学生の日常会話におけるうわさを類型化した。4大学において質問紙調査を行った結果、面白さが高く確実性が低い「非日常娯楽型」、面白さが低く不安喚起が高い「非日常不安型」、面白さと確実性が高い「日常型」の3類型のうわさが見出された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
11. 新潟中越地震後の避難所の研究	共	2007年1月26日	尚綱学院大学紀要, 54巻, 63-76	【担当部分】新潟での調査および調査担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【共著者名】水田恵三・堀洋元・西道実・松井豊・竹中一平・他3名 【概要】2004年10月に発生した新潟中越地震後に、長岡市と小千谷市周辺を中心に現地の15の避難所を訪れ、運営の担当者に面接調査を行い、その後郵送による追跡調査を行った。調査では、避難所の状況や運営方法、問題点などを尋ね、その結果を事例報告という形でまとめた。
12. 広域災害における避難所運営訓練システム(STEP)の開発過程と効果検証(査読付)	共	2005年9月1日	筑波大学心理学研究, 30, 43-49	【担当部分】STEP Ver5.0の開発、開発過程に関する内容の執筆(48-49頁担当) 【共著者名】松井豊・竹中一平・他8名 【概要】近年、広域災害に対する防災対策として地域住民の意識や行動等のソフト面の充実が重視されている。そこで、地域住民、特に若い世代の防災意識を高めるツールとして、広域災害後の避難所運営訓練システムを開発した。本論文では、大学生を対象としたSTEP Ver4.0の効果検証と、それに基づいて作成したVer5.0の開発過程をまとめた。
13. 日常会話におけるうわさと話題の比較-属性と機能の観点からの検討-(査読付)	共	2005年9月1日	筑波大学心理学研究, 30, 33-42	【担当部分】研究立案、データ解析、論文執筆(全頁担当) 【共著者名】竹中一平・松井豊 【概要】大学生の日常会話において話される様々なうわさや日常的话题に注目し、その内容を、面白さや曖昧性、不安喚起といった内容属性の評価と、娯楽機能や情報提供機能といった機能の評価の観点から比較した。その結果、日常的话题と比較したうわさの特徴として、曖昧性が高く面白い内容であることと、不安喚起が高い内容であることが見出された。
14. 対人コミュニケーションの観点からみたうわさの伝達(査読付)	単	2005年11月30日	社会心理学研究, 21巻2号, 102-115	大学生の日常会話におけるうわさを対象とし、対人コミュニケーションの観点から、接触・伝達率、日常的话题との関連、伝達に及ぼす要因を検討した。分析の結果、うわさの伝達には、会話相手との話題の共有といった対人コミュニケーションが影響することが明らかにされた。さらに、日常会話におけるうわさは、日常的话题が乏しいときに話題の少なさを補う機能を持つことが示唆された。
15. 広域災害における避難所運営訓練システムの構築と防災教育の効果に関する実験的研究(査読付)	共	2005年11月	地域安全学会論文集, 7, 425-432	【担当部分】STEP Ver5.0の開発、大学生を対象とした調査の実施およびデータ解析の一部を担当したが、論文中での抽出は不可能 【共著者名】元吉忠寛・松井豊・竹中一平・他7名 【概要】広域災害後の避難所運営訓練システム(STEP)のVer 0.5の開発過程について解説するとともに、被災経験のある神戸市住民と被災経験のない大学生を対象とした効果検証を行った。分析の結果、STEPは神戸市住民、大学生ともに「興味深かった」「学ぶことが多かった」という評価が高く、防災教育に有益であることが示唆された。
16. 青年期の友人関係研究の展望-1985年以降の研究を対象として-(査読付)	共	2004年9月1日	筑波大学心理学研究, 28, 55-67	【担当部分】論文執筆(全頁担当) 【共著者名】落合良行・竹中一平 【概要】1985年から2003年までの青年の友人関係に関する研究を概観し、青年期の友人関係研究がどのように展開してきたのかを、友人関係の構造に関する研究、友人関係の構造と様々な要因との関連研究、友人関係の発達の变化に関する研究の3つの観点に分けて論じた。

その他

1. 学会ゲストスピーカー

--	--	--	--	--

2. 学会発表

1. Measurement of dynamic changes in depressive state by drawing lines	共	2016年7月28日	31st International Congress of Psychology	【掲載ページ】262 【共同発表者】TAKENAKA, I., TABATA, N., & SUZUKI, T. 【担当部分】研究実施、論文の執筆 【概要】Secline方式を用いて、定期試験前後の抑うつ状態を測定し、楽観主義傾向が抑うつ状態の変動に影響するかどうかを検討した。得られた曲線をクラスタ分析によって分類し、各クラスタによって抑うつ程度が異なることを示した。そして、判別分析によって、楽観主義傾向の程度が各クラスタへの分類を予測できることを明らかにした。
2. データベースを利用した高校におけるプログラミング授業の実践と評価	共	2016年3月	情報処理学会コンピュータと教育研究会134回研究発表会	【共同発表者】兼宗進・白井詩沙香・竹中一平・長瀬寛之・島袋舞子・田邊則彦 【担当部分】データ分析、分析に関わる内容の執筆

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. Secline方式一線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(3)	共	2015年9月23日	日本心理学会第79回大会	<p>【概要】本研究では、プログラミング教育を通して情報システムのイメージを体験的に学ぶことを目的とし、高等学校共通教科情報を想定して、データベースを題材としたプログラミングの授業を設計した。本発表では、実際に高等学校で実践した本プログラミング授業の内容を紹介し、本授業評価として収集した授業アンケートの分析結果について報告した。</p> <p>【演題番号】2AM-002 【共同発表者】竹中一平・鈴木高志・太幡直也 【担当部分】研究計画の立案および調査の実施、論文の執筆</p> <p>【概要】線の回想的描画によって心理変数をデータ化する方法である“Secline方式”について、測定手法の妥当性を再検討するために、従来用いられている評定法による測定値とSecline方式による測定値とを比較した。分析の結果、両手法による測定値はほぼ一致することが示されたことから、Secline方式の妥当性が再確認された。</p>
4. 保育実習におけるストレス反応の変動—ネガティブな反芻と楽観主義傾向がストレス反応とその変動に及ぼす影響—	共	2013年11月2日	日本社会心理学会第54回大会	<p>【共同発表者】竹中一平・原奈津子・鈴木高志・太幡直也 【担当部分】研究計画の立案および調査の実施、論文の執筆</p> <p>【概要】保育実習生が実習期間に感じるストレスについて、ネガティブな反芻と楽観主義傾向が、ストレス反応とその変動の程度に影響するかどうかを検討した。調査の結果、ネガティブな反芻はストレス反応の変動に影響し、楽観主義傾向はストレス反応自体に影響することが明らかにされた。</p>
5. 保育実習生のストレス反応と曖昧さへの態度との関連	共	2012年9月13日	日本心理学会第76回大会	<p>【演題番号】3PMD09 【共同発表者】竹中一平・原奈津子 【担当部分】研究計画の立案および調査の実施、論文の執筆</p> <p>【概要】保育実習生が実習期間に感じるストレスについて、線を描画することで心理状態の変化を測定するSecline方式を用いて検討した。調査の結果、実習の前半では曖昧さ耐性が低い学生のストレス反応が高く、実習の後半では自尊感情が高い学生のストレス反応が低いことが示された。</p>
6. 保育実習生にとって実習期間のいつがストレスフルなのか？—Secline方式による回想データを用いた検討—	共	2012年11月10日	日本青年心理学会第20回大会	<p>【共同発表者】竹中一平・原奈津子 【概要】保育実習期間中の心理的ストレス反応の変化を、Secline方式および日誌法によって測定し、実習生にとって実習期間のどの時期がストレスフルなのかを明らかにした。</p>
7. 東日本大震災に関するうわさの伝達	単	2011年9月19日	日本社会心理学会第52回大会	<p>【掲載ページ】393 【概要】2011年3月11日の東日本大震災発災以降の曖昧さと不安の強い状況下におけるうわさの伝達を検討した。宮城県の大学生を対象とした質問紙調査を行った結果、従来の研究とは異なり、曖昧さの高い内容のうわさは積極的な伝達や確認行動を抑制することを示した。</p>
8. 新型インフルエンザに関するうわさの伝播	共	2010年9月	日本社会心理学会第51回大会	<p>【掲載ページ】130-131 【共同発表者】竹中一平・田中優他 【担当箇所】研究実施、発表</p> <p>【概要】感染状況の異なる4地域において新型インフルエンザに関するうわさを収集し、うわさとの接触と感染状況との関係を検討した。</p>
9. Secline: A new technique for assessing retrospective changes in psychological status from line drawings.	共	2010年7月	27 th International Congress of Applied Psychology	<p>【掲載ページ】1567 【共同発表者】SUZUKI, T., TABATA, N., TAKENAKA, I., etc. 【担当部分】研究実施・調査</p> <p>【概要】Secline方式を用いて、定期試験前後の抑うつ状態を測定し、Secline方式の信頼性・妥当性を確認した。その結果、リッカート法による測定と同程度の水準で、一定期間内の抑うつ状態の変化を把握することが可能であることが示された。</p>
10. ストレスと知覚負荷が選択的注意に与える影響	共	2010年11月	日本基礎心理学会第29回大会	<p>【掲載ページ】78 【共同発表者】佐藤広英・竹中一平・河原純一郎 【担当部分】研究・実験計画の立案および実験の実施</p> <p>【概要】ストレスと知覚負荷が選択的注意に及ぼす影響について、フランカ干渉課題を用いて検討した。ストレス刺激として、Trier Social Stress Testを用いた結果、ストレスと知覚負荷を同時に高めた場合、選択的注意が損なわれることを明らかにした。</p>
11. Secline方式一線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(2)	共	2009年8月27日	日本心理学会第73回大会	<p>【掲載ページ】207 【共同発表者】竹中一平・藤桂・伊藤正哉・鈴木高</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
12. 地域防災リーダー養成プログラムの開発に関する研究（1）仮想訓練システム(STEP: Simulation Training of Earthquake Shelter Program)を実施する際の課題（1）	共	2009年8月27日	日本心理学会第73回大会	志・太幡直也 【担当部分】論文執筆 【概要】連続発表である「Secline方式-線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(1)」において提案されたSecline方式について、測定手法の妥当性を検討した。本研究でSecline方式によって測定したK6尺度と関連することが予測される反芻尺度および楽観主義尺度との関連を検討し、妥当性の検証を行った。 【掲載ページ】165 【共同発表者】西道実・清水裕・松井豊・田中優・福岡欣治・元吉忠寛・水田恵三・堀洋元・竹中一平 【担当部分】仮想訓練システムの作成 【概要】地域防災の主役である住民を直接的に支援し、震災に対して主体的に取り組むことのできる地域防災リーダーを養成するプログラムの開発に向けて、大規模災害時の仮想訓練システム(STEP)の改訂を実施するための研究の一環として、現状のSTEPの課題を整理し、問題点を拾い上げた。
13. Secline方式一線の回想的描画による心理変数のデータ化の試み(1)	共	2009年8月27日	日本心理学会第73回大会	【掲載ページ】206 【共同発表者】鈴木高志・藤桂・伊藤正哉・太幡直也・竹中一平・櫻井茂男 【担当部分】研究・調査計画の立案および論文執筆の一部 【概要】個人内の心理状態の時系列的変化について、回想・描画を求めることによってデータ化する「Secline方式 (Searching continuous line method)」の手法の提案および測定法としての信頼性の検証を行った。
14. 日常会話におけるうわさの伝達—対人コミュニケーションの観点から—	単	2009年8月	日本心理学会第73回大会	【掲載ページ】(80) 【概要】大学生の日常会話で話されるうわさを対象とした7つの実証研究の結果に基づき、対人コミュニケーションの観点から、うわさの伝達に関する個人内過程をモデル化した。そして、作成したモデルの各段階において評価される要因を、うわさの種類ごとに整理し、うわさの伝達に関する意思決定のルートについて論じた。
15. ストレスは注意資源を消費するの か?	共	2009年12月5日	日本基礎心理学会第28回大会	【掲載ページ】69 【共同発表者】竹中一平・佐藤広英・河原純一郎・熊田孝恒 【担当部分】研究計画の立案および実験の実施、論文の執筆 【概要】ストレスが注意の選択性に対して及ぼす影響についてフランカ干渉課題を用いて検討した。その結果、知覚負荷の程度に関わらず抗ストレス群の方が干渉効果が強かったことから、ストレスは注意資源を消費することが示された。
16. 「イチロー3,085安打で日本記録に並ぶ」ニュースの伝播過程	単	2009年10月1日	日本社会心理学会第50回大会	【掲載ページ】688-689 【概要】2009年4月16日(木)に報道された「イチローが3,085安打で日本記録に並ぶ！」ニュースについて、その伝播過程を接触および伝達メディアの観点から検討し、接触日によってメディアが変化することを明らかにした。
17. 世代別にみた都市伝説との接触経験	単	2008年9月20日	日本心理学会第72回大会	【掲載ページ】190 【概要】近年マスメディアにおいて取り上げられることが増加してきた「都市伝説」について、直近3ヶ月以内の接触経験率や接触メディアの種類を、10代、20代、30代以上の3群で比較した。分析の結果、どの世代も概ね50%程度の接触経験率であり、その内容も似通っていることが明らかにされた。
18. 地域防災力の向上に関する研究（6）—一家庭内での防災活動を規定する要因：東京調査から—	共	2007年9月24日	日本社会心理学会第48回大会	【掲載ページ】764-765 【共同発表者】堀洋元・元吉忠寛・清水裕・西道実・松井豊・水田恵三・福岡欣治・竹中一平・田中優・新井洋輔 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために行った神戸市での調査と東京都内での調査の結果を比較し、震災を経験したことはないものの、大規模な地震が想定されている地域である東京都区部の特性の観点から、その結果を考察した。
19. 家庭内防災力の向上に関する研究（5）—一家庭での防災活動を規定する要因：神戸調査から—	共	2007年9月18日	日本心理学会第71回大会	【掲載ページ】132 【共同発表者】元吉忠寛・西道実・福岡欣治・水田恵三・竹中一平・清水裕・堀洋元・松井豊・新井洋輔・田中優 【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
20. 広域災害における避難所運営訓練システムの開発(3)	共	2007年9月18日	日本心理学会第71回大会	<p>び解析の一部を担当したが、論文中で当該ページの抽出は不可能</p> <p>【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために行った神戸市での調査と東京都内での調査の結果を比較し、震災を経験した住民の多い神戸市の特性の観点からその結果を考察した。</p> <p>【掲載ページ】143</p> <p>【共同発表者】竹中一平・西道実・清水裕・堀洋元・水田恵三・松井豊・田中優・福岡欣治・新井洋輔・元吉忠寛</p> <p>【担当部分】論文執筆(全頁)</p> <p>【概要】これまでに開発してきた広域災害後の避難所運営に関するシミュレーションプログラム(STEP Ver5.0)の効果と有効性について検討することを目的とし、被災経験のある神戸市民12名、被災経験のない大学生102名および防災関係者192名にSTEPを実施し、本プログラムが実際の避難所での経験に即しており、一定程度の一般性を持つプログラムであることが推定された。</p>
21. 新潟中越地震後の避難所の研究(4)―地域の紐帯を中心として―	共	2007年9月18日	日本心理学会第71回大会	<p>【掲載ページ】152</p> <p>【共同発表者】水田恵三・松井豊・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・堀洋元・元吉忠寛・新井洋輔・竹中一平</p> <p>【担当部分】新潟での調査および調査担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文中で当該ページの抽出は不可能</p> <p>【概要】新潟中越地震における避難所の運営に関するフィールド調査を行ったいくつかの避難所のリーダーに対して追跡調査を行い、その結果を地域住民の結びつきの点から考察した。</p>
22. 伝達形態別にみたうわさの伝達に影響する要因	単	2007年9月	日本社会情報学会JSIS第12回大会	<p>【掲載ページ】242-247</p> <p>【概要】大学生の日常会話におけるうわさを対象とし、内容属性と機能の評価が、うわさの伝達意図と確認意図に及ぼす影響について検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、伝達意図と確認意図それぞれに対して影響するうわさの内容属性や機能が異なることが明らかにされた。うわさの伝播には、積極的に内容を話そうとする伝達意図による伝播と、情報内容を尋ねようとする確認意図による伝播の2形態が存在することが示唆された。</p>
23. 類型論の観点からみたうわさの伝達に影響を与える要因	単	2007年9月	日本社会心理学会第48回大会	<p>【掲載ページ】118-119</p> <p>【概要】竹中・松井(2007)におけるうわさの3類型理論に基づいてうわさを分類し、各類型のうわさの伝達に影響する要因を明らかにするために質問紙調査を行った。4大学における調査の結果、類型によってうわさ内容の伝達意図や確認意図、伝達経験に影響する要因が異なることが明らかにされた。</p>
24. 家庭内防災力の向上に関する研究(2)―家庭内防災意識を規定する要因：神戸調査から―	共	2007年6月16日	日本グループダイナミクス学会第54回大会	<p>【掲載ページ】186-187</p> <p>【共同発表者】福岡欣治・西道実・元吉忠寛・水田恵三・竹中一平・清水裕・堀洋元・松井豊・新井洋輔・田中優</p> <p>【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中で当該ページの抽出は不可能</p> <p>【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために、神戸市におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、家庭内防災意識を規定する要因に関する分析結果の報告を行った。</p>
25. 家庭内防災力の向上に関する研究(3)―研究目的と東京都内での調査―	共	2007年6月16日	日本グループダイナミクス学会第54回大会	<p>【掲載ページ】188-189</p> <p>【共同発表者】清水裕・西道実・堀洋元・松井豊・元吉忠寛・竹中一平・新井洋輔・田中優・水田恵三・福岡欣治</p> <p>【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中で当該ページの抽出は不可能</p> <p>【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために、東京都内におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、研究目的と基礎データの報告を行った。</p>
26. 家庭内防災力の向上に関する研究(4)―家庭内防災意識を規定する要因：東京調査から―	共	2007年6月16日	日本グループダイナミクス学会第54回大会	<p>【掲載ページ】190-191</p> <p>【共同発表者】田中優・清水裕・水田恵三・西道実・竹中一平・堀洋元・元吉忠寛・福岡欣治・松井豊・新井洋輔</p> <p>【担当部分】サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文中で当該ページの抽出は不可能</p> <p>【概要】地域住民の家庭内防災力を規定する要因を</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
27. 地域自主防災組織住民の防災意識	共	2006年9月	日本社会心理学会第47回大会	<p>明らかにするために、東京都内におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、家庭内防災意識を規定する要因に関する分析結果の報告を行った。</p> <p>【掲載ページ】766-767 【共同発表者】 新井洋輔・元吉忠寛・松井豊・西道実・清水裕・竹中一平・田中優・福岡欣治・堀洋元・水田恵三 【担当部分】 調査の実施および解析の一部を担当したが、論文の中で該当頁の抽出は不可能 【概要】 自主防災組織に所属する住民を対象とし、学生の防災意識との比較との比較を通して、防災意識尺度と災害感の関連を検討した。その結果、防災組織住民の防災意識の高さが示され、防災意識が高く防災対策を行っている人ほど、災害は運命であると受け入れながらも工夫によって乗り越えられると考えることが明らかにされた。</p>
28. 家庭内防災力の向上に関する研究(1)－研究目的と神戸市での調査－	共	2006年9月	日本社会心理学会第47回大会	<p>【掲載ページ】770-771 【共同発表者】 西道実・松井豊・新井洋輔・竹中一平・清水裕・水田恵三・元吉忠寛・福岡欣治・田中優・堀洋元 【担当部分】 サンプリングの実施、調査の実施および解析の一部を担当したが、論文の中で該当頁の抽出は不可能 【概要】 地域住民の家庭内防災力を規定する要因を明らかにするために、神戸市におけるサンプリング調査を通して、防災意識と防災行動との関連を検討した。本発表では、研究目的と基礎データの報告を行った。</p>
29. 大学生における友人の機能と行動が関係継続意図に与える影響－HI友人/LI友人アプローチに基づいて－	単	2006年9月	日本社会心理学会第47回大会	<p>【掲載ページ】704-705 【概要】 普段から良く会う接触頻度の高い友人(HI友人)と、地元に戻ったときだけに会うような接触頻度の低い友人(LI友人)について、それぞれの友人に期待する機能や友人に対して取る行動が、友人関係の継続意図に対して与える影響について検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、HI友人は具体的なサポートがあるほど、LI友人は過去の経験を共有していると思っているほど関係継続意図が高いことが明らかになった。</p>
30. 東京都区部における地域自主防災組織の活動事例	共	2006年11月	日本心理学会第70回大会	<p>【掲載ページ】157 【共同発表者】 清水裕・松井豊・西道実・田中優・新井洋輔・竹中一平・福岡欣治・堀洋元・水田恵三・元吉忠寛 【担当部分】 調査実施の一部を担当したが、論文の中で該当頁の抽出は不可能 【概要】 2006年において積極的な防災活動を実施している東京都区部の2つの自主防災組織を対象に、地域の特徴や自主防災組織の組織化の経緯、現在の活動状況や発生している問題等に関して尋ねる面接調査を実施し、その結果を報告した。</p>
31. 防災意識尺度作成の試み	共	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	<p>【掲載ページ】702-703 【共同発表者】 新井洋輔・元吉忠寛・松井豊・西道実・清水裕・竹中一平・田中優・福岡欣治・堀洋元・水田恵三 【担当部分】 調査の実施および解析の一部を担当したが、論文の中で該当頁の抽出は不可能 【概要】 防災意識の高さを捉える指標として、地震や水害などの災害に対する準備が行われている程度を測定する尺度を開発し、学生および防災関係者に対して実施し、尺度の妥当性および信頼性について検証した。</p>
32. 新潟中越地震における避難所の事例研究(2)	共	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	<p>【掲載ページ】700-701 【共同発表者】 堀洋元・西道実・清水裕・松井豊・竹中一平・新井洋輔・元吉忠寛・田中優・福岡欣治・水田恵三 【担当部分】 新潟での調査と担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文の中で該当頁の抽出は不可能 【概要】 新潟中越地震における避難所の運営に関するフィールド調査の事例報告を行った。本発表では、小千谷市を中心とした7つの避難所について運営方法や避難所となった学校との連携について尋ねた。</p>
33. 新潟中越地震における避難所の事例研究(1)	共	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	<p>【掲載ページ】698-699 【共同発表者】 西道実・堀洋元・清水裕・松井豊・新井洋輔・竹中一平・元吉忠寛・田中優・福岡欣治・水田恵三 【担当部分】 新潟での調査と担当地区に関する報告書の執筆を担当したが、論文の中で該当頁の抽出は不可能</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
34. 広域災害における避難所運営訓練システムの開発（2）	共	2005年9月	日本心理学会第69回大会	<p>【概要】新潟中越地震における避難所の運営に関するフィールド調査の事例報告を行った。本発表では、小千谷市の北部地域における5つの避難所について運営方法や避難所となった学校との連携等について尋ねた。</p> <p>【掲載ページ】218 【共同発表者】元吉忠寛・松井豊・新井洋輔・竹中二平・水田恵三・西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・堀洋元 【担当部分】システム開発および調査の実施を担当したが、論文中での該当頁の抽出は不可能 【概要】広域災害後の避難所運営訓練システム（STEP）の開発過程を報告した。Ver0.5を大学生と被災経験のある神戸住民に実施し、プログラムの効果と有用性について質問紙調査によってフィードバックを得た。その結果、参加者の評価は学生よりも神戸住民の方が高く、プログラムの有効性やリアリティが確認された。</p>
35. 大学新入生が話題にするうわさの時期的再帰性—大学新入生への3年間の反復調査による検討	単	2005年9月	日本心理学会第69回大会	<p>【掲載ページ】72 【概要】うわさの「時期的再帰性」について検討するために、大学生集団において会話されるうわさ内容の変化について、3年間の調査結果を再分析した。分析の結果、大学新入生の間では、年度によって話されるうわさの主要な内容が変化していることや、入学直後の時期に多く話されることが明らかにされた。</p>
36. うわさの伝達に関する意思決定過程—情報内容の評価の観点からの検討—	単	2005年9月	日本社会心理学会第46回大会	<p>【掲載ページ】164-165 【概要】うわさと接触した際の情報内容の認知処理について、面白さ、不安喚起、重要性、確実性の4つの内容属性の評価の観点から検討した。大学生を対象とした質問紙実験を行い、分散分析によって情報内容の認知処理の順序性について解析した。その結果、うわさと接触した後、まず重要性の判断が行われ、重要性が低い場合は不安喚起の判断が、そして不安喚起が低い場合には面白さの判断が行われるという順序性が推定された。</p>
37. うわさと話題の接触率と会話相手との親密度—大学別にみたうわさと話題—	単	2004年9月	日本心理学会第68回大会	<p>【掲載ページ】198 【概要】うわさが多く話される集団の集団特性を明らかにするために、異なる集団特性をもつ3大学において調査を行った。日常的な話題との接触率や、会話相手との親密度について大学別に比較した結果、全体的に会話相手と親しく、日常的な話題も多く話している大学において、うわさも多く話されていた。したがって、集団成員の普段からの会話率や仲の良さが、うわさとの接触にも影響することが推測された。</p>
38. 日常会話におけるうわさと話題の構造（2）	単	2004年7月	日本社会心理学会第45回大会	<p>【掲載ページ】250-251 【概要】大学生が日常会話で話すうわさと日常的话题を比較した竹中（2003）の知見を一般化すること、およびうわさと日常的话题をより簡便に分離することを目指して、3大学において調査を行った。面白さ、確実性、不安喚起の3つの内容属性の評価を用いて、うわさと日常的话题を比較し、竹中（2003）と同様の構造を得た。</p>
39. 時期による話題の変化と会話相手への親密度—大学新入生のうわさと話題—	単	2003年9月	日本心理学会第67回大会	<p>【掲載ページ】147 【概要】大学新入生が会話するうわさや日常的话题の時期による変化に関して、会話相手との親密度の観点から検討した。大学新入生を対象とし、3時点のパネル調査を行った結果、入学直後の5月には、うわさが、日常的话题に比べて親密度の低い相手とでも会話できる話題として機能していた一方で、2月頃になると、うわさも日常的话题も共に親しい相手と会話するようになることが明らかになった。</p>
40. 日常会話におけるうわさと話題の構造	単	2003年9月	日本社会心理学会第44回大会	<p>【掲載ページ】212-213 【概要】大学生が日常会話で話すうわさと日常的话题を、内容属性および機能の評価の観点から比較し、両者の共通点や相違点について検討した。3種類のうわさと3種類の日常的话题について、7内容属性と4機能の評価を求め、それぞれ比較したところ、うわさは日常的话题に比べて曖昧性が高いことが明らかにされた。さらに、不安喚起の高い内容を含むことが、うわさに特徴的であることも見出された。</p>
41. 対人コミュニケーションの観点から見たうわさの伝達	単	2002年11月	日本社会心理学会第43回大会	<p>【掲載ページ】770-771 【概要】従来集合現象として扱われてきたうわさを、対人コミュニケーションの側面から捉えなおし、会話相手との話題の共有や、会話における内容の解釈が、うわさの伝達に対して影響を与えるかどうか</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
				を検討した。大学生を対象とした2回の時系列調査を行い、うわさの伝達に对人コミュニケーション要因が影響することを明らかにした。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 頑張り過ぎは失敗のもと—覚醒水準のメカニズム	単	2016年6月1日	教職課程, 619, 106-107.	教員を目指す学生や現職教員向けの一般雑誌において、覚醒水準とは何かについて、具体的なクラス内の事例を用いて、ヤーキーズ・ドッドソンの法則や、覚醒水準を下げる方法を含めて概説した。
2. 社会的ネットワークを理解する	共	2015年8月20日	北大路書房	【担当部分】全文317頁中35頁、担当：第8章「スモールワールド、サークル、コミュニケーション」（145-179頁）の翻訳 【概要】社会的ネットワークにおける「スモールワールド」「社会的サークル」「コミュニティ」の形成についてまとめた章を翻訳した。
3. 期待をすれば子どもは伸びる？—教師期待効果のメカニズム	単	2015年6月1日	教職課程, 41, 100-101	教員を目指す学生や現職教員向けの一般雑誌において、教師期待効果とは何かについて、具体的なクラス内の事例を用いて、自己成就予言との関係や、期待のメカニズムを含めて概説した。
4. 時系列データの分析と適応性の測定に関する問題の指摘—大隅・小塩・小倉・渡邊・大崎・平石論文へのコメント—	単	2014年2月10日	青年心理学研究, 25, 171-175	大隅・小塩・小倉・渡邊・大崎・平石(2013)による論文「大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討—第1志望か否か、合格可能性、仲間志向に注目して—」に対する意見を述べた。第1に当該論文で使用された潜在曲線モデルの結果の記述やその解釈に関する疑問を述べ、第2に従属変数として用いられている適応性に関する疑問を述べた。そして第3に、当該論文で対象とされている「大学新入生」に関する疑問を指摘した。
5. 日本基礎心理学会 優秀論文賞	共	2013年12月	日本基礎心理学会	【概要】基礎心理学研究第31巻に掲載された論文「急性ストレスが選択的注意に及ぼす影響」が高く評価され、優秀論文賞を受賞した。
6. 鼎談「デマと真実の狭間で、社会的リアリティはいかにして形成されるか」	共	2011年9月	国立情報学研究所ニュースNII Today, 第53号	【掲載ページ】4-7 【鼎談者】小林哲郎・竹中一平・森達則 【概要】3月11日の東日本大震災以降、大きな社会問題となったデマや噂話について、それぞれが自身の研究内容を紹介しつつ、それらへの対策について議論した。
7. 日本基礎心理学会 優秀発表賞 受賞	共	2011年12月	日本基礎心理学会	【概要】日本基礎心理学会第29回大会（平成22年）において発表された研究「ストレスと知覚負荷が選択的注意に与える影響」が高く評価され、優秀発表賞を受賞した。
8. 地域防災コミュニティの活性化と家庭内防災力の向上に関する研究	共	2007年3月	文部科学省科学研究費補助金（課題番号：17530465）研究成果報告書	【共著者】西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・松井豊・水田恵三・堀洋元・元吉忠寛・新井洋輔・竹中一平 【担当部分】全文97頁中、担当：第4章「避難所運営訓練システム（STEP）の完成」第3節「完成版の構成」（67-83頁）
9. マーケティング・リサーチの理論と実践—技術編—	共	2007年12月3日	同友館	【担当部分】全文468頁中40頁、担当：第21章「多次元尺度構成法とコンジョイント分析」（315-355頁）の翻訳 【概要】多次元尺度構成法とコンジョイント分析に関して、それぞれ分析手法の手続きや適用事例について翻訳した。
10. 上武学術奨励賞 受賞	単	2006年9月	筑波大学心友会	【概要】社会心理学研究第21巻に掲載された論文「対人コミュニケーションの観点からみとうわさの伝達」が高く評価され、上武学術奨励賞を受賞した。
11. 地域防災コミュニティの活性化に向けた支援プログラムの開発に関する研究	共	2005年3月	文部科学省科学研究費補助金（課題番号：15530413）研究成果報告書	【共著者】西道実・清水裕・田中優・福岡欣治・松井豊・水田恵三・堀洋元・元吉忠寛・新井洋輔・竹中一平 【担当部分】全文104頁中、担当：第3章「防災訓練プログラム—避難所運営訓練システム—の開発」第3節「訓練システムの開発経緯と進捗」（63-65頁）
6. 研究費の取得状況				
1. 平成23年度 就実教育実践研究センター研究助成	共	2011年4月～2012年3月	就実大学 就実教育実践研究センター	【概要】「保育者を目指す学生における実習ストレスと実習状況に対するあいまいさとの関連」のテーマにて、就実大学人文科学部原奈津子准教授と共同で助成金を得た。

学会及び社会における活動等

年月日	事項

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2015年7月～現在	日本パーソナリティ心理学会 会員
2. 2015年5月～現在	情報処理学会 会員
3. 2012年4月～現在	日本青年心理学会 会員
4. 2002年4月～現在	日本社会心理学会 会員
5. 2002年4月～現在	日本心理学会 会員